

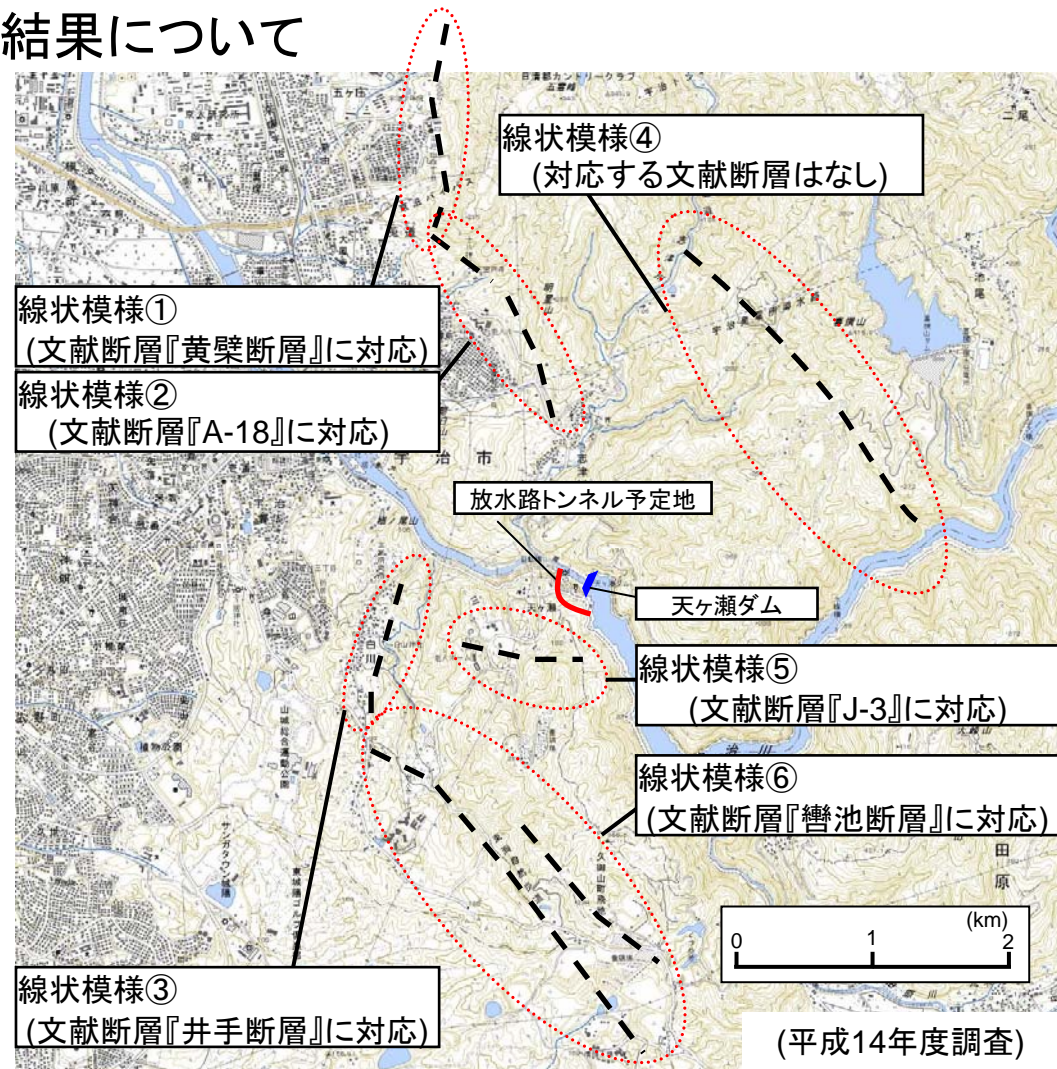
# 天ヶ瀬ダム再開発事業における地質調査について

## 1. 活断層調査(第四紀断層調査)結果について

空中写真(40,000分の1)、地形図(25,000分の1)の判読により天ヶ瀬ダム(放水路トンネル予定地含む)から半径3kmの範囲内で右図の6つの線状模様(活断層の可能性のあるもの)を抽出し、現地調査を実施しました。

その結果、天ヶ瀬ダムの下を通る活断層はないことを確認しました。

なお、右図の「線状模様②」は天ヶ瀬ダムの方向に向かっていますが、線状模様の端から天ヶ瀬ダムまでの間の地層を現地調査した結果から、この部分については、20~30万年程度は活動していないものと確認しています。

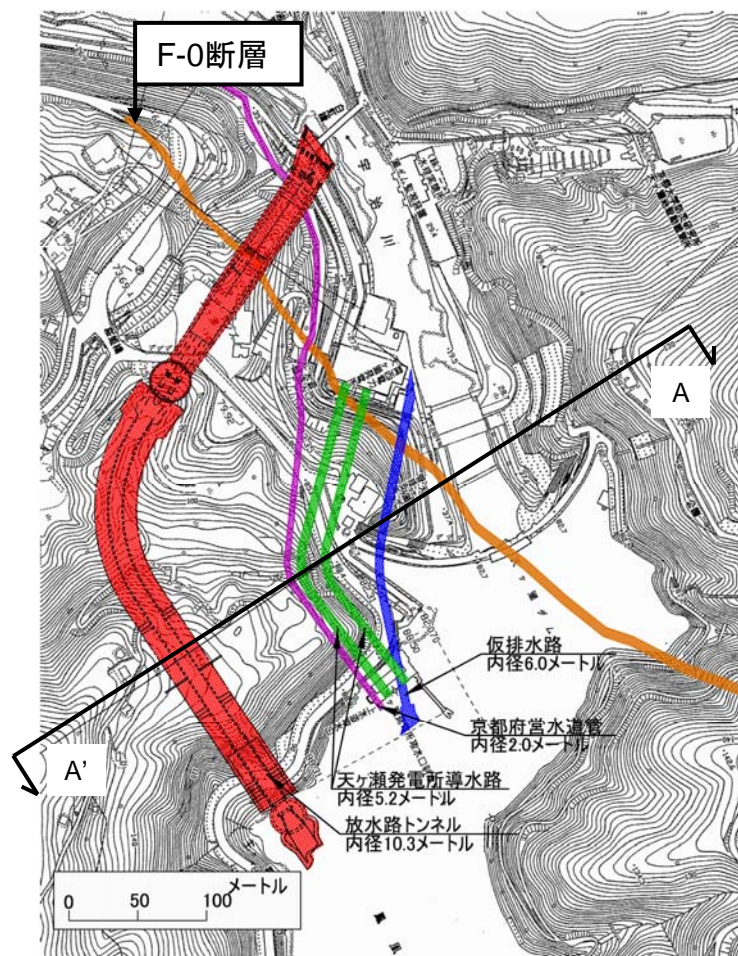


注1) 一般の方から質問のありました天ヶ瀬ダム近傍に位置するF-O断層は、活断層ではありません。

注2) 断層名の「A」とは『近畿の活断層』(2000年)、「J」とは『京都の地質環境』(2000年)に記載されていることを示します。

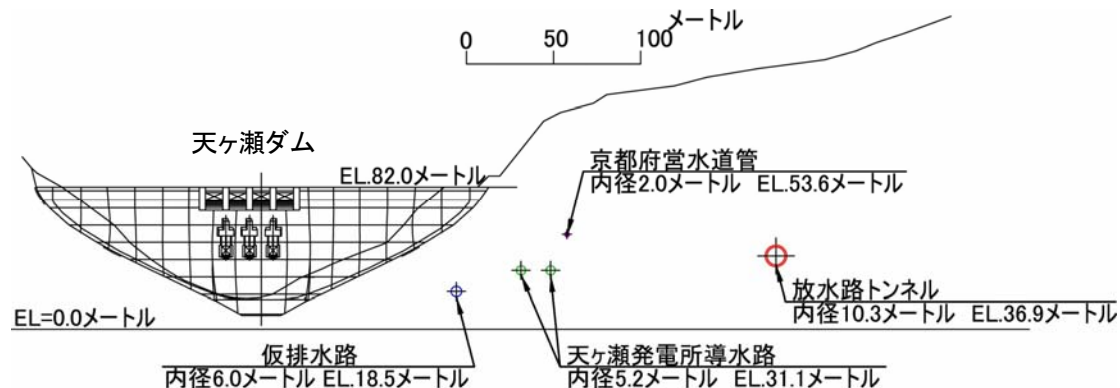
## 2. トンネル掘削による周辺地盤への影響について

天ヶ瀬ダム周辺平面図



注) F-0断層とは、天ヶ瀬ダム建設時に確認されている断層であり、活断層ではありません。なお、「F-0」とは、資料整理上の記号です。

天ヶ瀬ダムと各施設の位置関係図(A-A'断面)



### ■トンネル位置の影響

ダム本体端部よりほぼ100メートル離れると、基礎岩盤の応力変位の影響は受けなくなります。

当トンネルとダムとの離隔距離は150メートル確保していることから安全と判断しています。

なお、解析は有限要素法にて実施しました。

※受付番号1193,1196への回答より

### ■トンネル施工の影響

トンネルの掘削工法に関しては、有限要素法による弾性解析により、地山の緩み、天端沈下、内空変位、地表面沈下について検討を行いました。

その結果、断層部は地質的に弱いため、覆工厚を厚くするなどトンネルの構造を丈夫にしたり、トンネル周辺地盤の補強を行うことにより、ダム本体を支えている地盤に影響が無いように対処する予定です。

※受付番号1193,1196への回答に追記